

が見えました。そのふもとにはヤシコダン、テレケブ沢、下テレケブ沢、向こう岸には打内太、クーリョツキ、ニヲビウカ、ラシヨシケ、ヲヲクリキ、そしてリフンライです。リフンライの元の名はレフングルライで、その意味は「海外（レフン）の者（クル）の死（ライ）」ということで、その上には穴居跡のトイチセが30軒余りありました。土地の人たちはトイチセのことを小人の住居跡だと言っていますが、これは小人ではなく、大昔の人たちが暮らした穴で、こういう遺跡は本州の各地で見たことがあります。

例えば奥州の松島（現宮城県松島の辺り）には岩壁に穴をあけて住んだ跡があり、常陸國風土記の茨城郡には「いたるところに土の穴倉を設けて掘り、常に穴に住み、人が来ることがあると、ただちに穴倉に入つて隠れ、その人が去ると、また野原に出て遊んだ」と記してあります。

また、この山からは縄文時代の石斧や土器のかけらなどが出土するそうで、私もここで2枚拾いましたが、土器が完全な形で出土するのは極めて珍しいそうです。地元の言い伝えによ

れば、その昔、この地に鉄製の器具がなかつた時代は鍋も土でつくり、野菜や魚、獣の肉などを切るのには縄文時代の石斧を使い、家財道具を作るのには縄文時代の石錐や弥生時代の石斧などを使い、人と打ち合つたり、叩き合いをしたりするのには石でできた斧や槌を使つたといいます。

これはつまり、日本書紀で道臣命が歌つた「みつみつし 来目の子らが頭椎い 石椎い持ち撃ちてし止まむ」（武勇に秀でた来目の若者たちが頭槌の太刀、石槌の太刀を手に持つて、敵を撃ちのめしてしまおうぞ）と同じことであるでしようし、令義解（律令の解説書）の軍防に「石を投げ打つ」というのがあり、これは小石に繩をつけて投げつけて相手を倒した物だと思われます。またその近くにはそれらをつくるために使つた砥石も3つ4つと見つけたので、そのうちの1つを拾つて舟に持ち込みました。

この地のアイヌが「私たちは捉として和人の土地から何ひとつ持つて来なくて不自由なこと